

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	澁谷友和
2. 審査委員	主査：吉水裕也（兵庫教育大学教授） 副主査：志村喬（上越教育大学教授） 委員：森秀樹（兵庫教育大学教授） 委員：南埜猛（兵庫教育大学教授） 委員：福田喜彦（兵庫教育大学准教授）
3. 論文題目	小学校社会科未来洞察型授業の開発研究
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 澁谷友和 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和3年1月11日（月・祝） 14時00分～15時00分</p> <p>場所：zoomによる遠隔会議</p> <p>(1) 学位論文の構成と概要</p> <p>序章 研究の意義と方法</p> <p>第I章 社会科における未来予測型授業の先行研究の検討</p> <p>第II章 「予測不可能な未来」にアプローチする小学校社会科の授業構成論</p> <p>第III章 希望の未来像を描く未来洞察型授業－第5学年「これからの食料生産」を例に－</p> <p>第IV章 希望の未来像を描く未来洞察型授業－第6学年「わたしたちのくらしと税の役割」を例に－</p> <p>第V章 希望の未来像を描く未来洞察型授業－第4学年「わたしたちのくらしと水道水」を例に－</p> <p>終章 本研究の成果と課題</p> <p>本研究は、これまで小学校社会科で実践されてきた未来予測型授業の構成を批判的に検討するとともに、今日の予測不可能な社会の変化に主体的に関わり、これからの社会の変化や自分の行動しだいで到達できる希望の未来を描く児童の育成を目指す未来洞察型の授業構成を提案するものである。この目的のために、序章ではこれまで実践されてきた未来予測型授業の3点の課題を明らかにした。</p> <p>第I章では、小学校社会科授業における未来予測型授業の課題とその改善の方向性を提示した。過去の文学や絵画における未来像や、従前の未来予測型授業の先行研究を分析・検討する中で、時間スケールの設定や未来の捉え方を整理した。複数の時間にアプローチし、起こる確率の高い未来予測のみではなく、不確実な要素も取り込み、起こる確率の低い未来にも着目する</p>

「未来洞察」の考え方を組み込んだ小学校社会科の授業設計への改善の方向性を示した。

第Ⅱ章では、小学校社会科における未来洞察を、「過去や現在の社会事象から起こる確率の高い未来とその影響を予測した上で、それとは逆の、現時点では起こる確率は低いかもしれないが、自分たちの希望の未来像を仮説的に描き、その実現に向けてのシナリオを創り出すこと」と定義し、この定義のもととなるイギリスのヒックス（Hicks, D.）による仮説的に希望のある未来を描かせる授業構成を検討し、未来洞察型の授業設計を提起した。希望の未来を描かせる手段として、ヒックスの「すでに描かれた4つのシナリオの選択」という方法ではなく、希望の未来のシナリオを実際に書く方法を取り入れた。さらに、時間の広がりを設定して、複数の時間スケールで未来を捉える内容構成とした。ヒックスのタイムラインという考え方に、吉野やブローデルの時間の構造の視点を援用し、短期的、中期的、長期的時間スケールという3つの時間にアプローチし未来を考える方法として、時間のマルチ・スケールアプローチという方法を新たに提起した。起こる確率が高い未来を捉える際に、中期的、長期的な時間スケールで出現する内容が異なり、また、起こる確率が低い未来を捉える際にも、よりその未来を現実的にするための目標は、時間スケールによって異なるからである。

第Ⅲ章では第5学年「これからの食料生産」を例に、先行実践が、地産地消などの学習でとどまるものが多い中、未来洞察を組み込んだ実践について論じた。ドローンを活用した産地と消費者の新しいつながりという希望の未来を描くシナリオも見られた。

第Ⅳ章では第6学年「わたしたちのくらしと税の役割」を例に、起こる確率の高い消費税の増税の賛成か反対かという価値判断ではなく、それとは異なる希望の税のあり方についてシナリオを描く実践について論じた。

第Ⅴ章では第4学年「わたしたちのくらしと水道水」を例に、起こる確率に高い水道料金の値上げ、水道水インフラの老朽化という未来予測をもとに、その未来とは逆の希望の未来を描き、水道料金が上がらない仕組み、水道水インフラに対する新しい仕組みなど、自分たちが考える希望の未来のシナリオを作成する実践について論じた。各学年の実践の結果、起こる確率が低い未来にも着目し、希望のある未来のシナリオを描く授業設計にすることで、主体的に情報を収集、解釈し、自分たちの未来を積極的に考え、その実現のための方法を描くことができ、子どもの意欲的な学びの実現に向けた授業改善の1つのモデルとして提起できた。

終章では、本研究の目的である未来洞察型の授業構成論の研究課題について、成果と課題をそれぞれ3点ずつ述べた。

(2) 審査経過

本研究は、小学校社会科未来洞察型授業の授業構成論を検討するとともに、今日の予測不可能な社会の変化に主体的に関わり、これからの社会の変化や自分の行動しだいで到達できる希望の未来を描く児童の育成を目指す授業構成論を提起することを目的としたものである。

本研究の成果は三点に整理できる。①過去の文学や絵画における未来像や、従前の社会科における未来予測型授業の先行研究を分析・検討する中で、時間の設定や未来の捉え方を整理できたこと。②ヒックスの論理を発展させ、複数の時間スケールにアプローチし、現在のところ起こる確率は低いかもしれないが希望のある未来を描く未来洞察型の授業構成論を提起できたこと。③提起した授業構成論にもとづき、具体的な授業モデルを開発するとともに、検証授業を通して、その有効性を検証できたこと。

これらの点から、本研究は、社会科授業実践の改善に貢献するものであるとの高い評価を得た。

(3) 審査結果

以上により、本審査委員会は 澁谷友和 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。